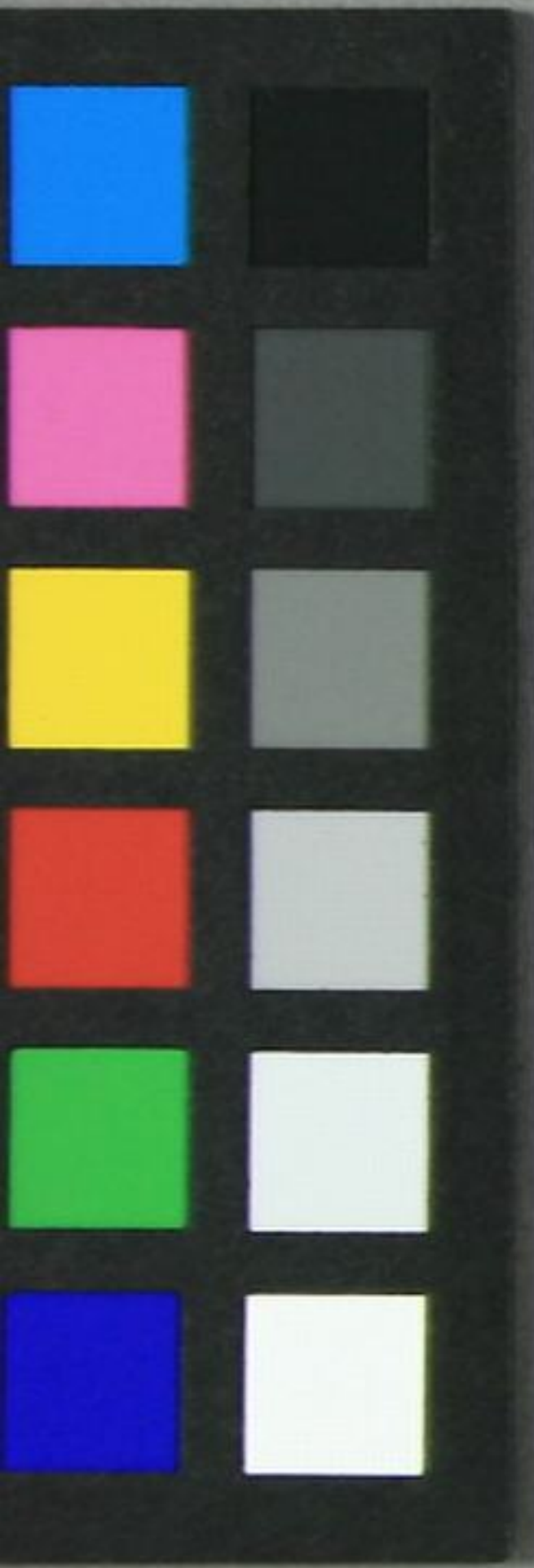
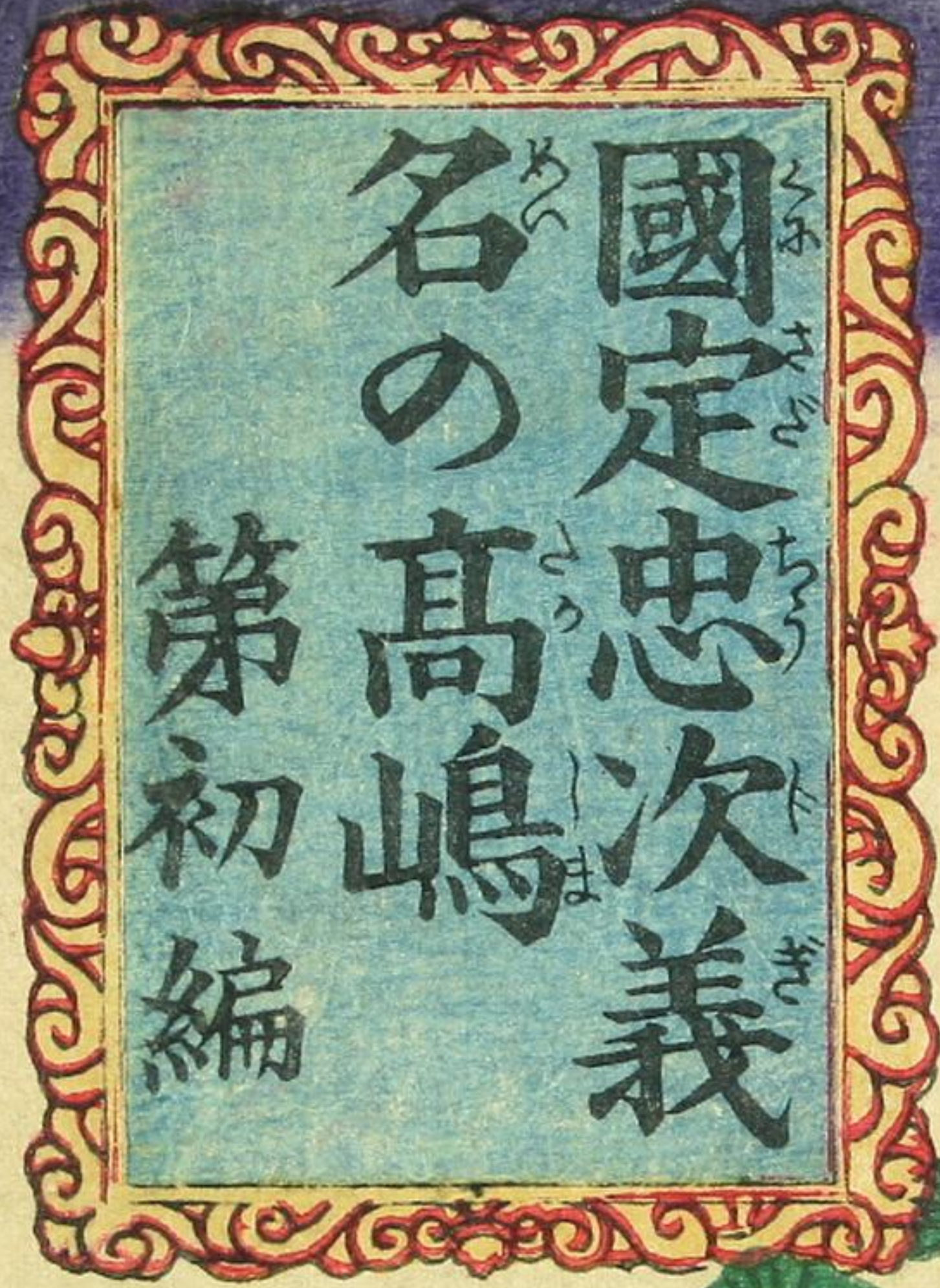


川上鼠邊編輯

梅堂國政画

國定忠次義
名の高嶋

第初編





A 485
1

48-8211

古きと捨て新くたぐり生糸のそとあらはれど所も同ト上刃の蚕も
 共生育て四海は其名を止たも國定忠次が實録を下文句つめて金松
 堂が望むは知らぬと言も本意なく請合ふと俵捨置しは幸此程
 朋友は無沙汰の詫とて持来る高島日記と印せし帳面開けは嘉永
 年間忠次がるせし諸業より妻かあそが浮川竹流とく水清き
 市川筋へ身と浮べ開化の御代は時を得て成さぬ中ある育子ハ名譽を
 世界は輝くを其左團治の看病よて目出度黄泉の客と成し迄委敷
 認めし秘書なりコハ有がや忝あや天より我と与へ品と芝居気取て
 頂き急ぎ机に寄懸りランプの明り用不足無尽燈やら気発油やら照せ
 ど元より暗き眼の初心の記者が筆に餘とどコハ一番國定の忠次を楯よ
 一六勝負春の初めの遊びは若君達も何れも無やうに達と願ふはなん
 能きめの
 辰のとし

川上鼠邊記



國定忠次

義名

高島の

初編

上の巻

川上鼠邊

梅堂國政画

金松堂上梓





又足形をたふさぐに
 りる小村ありけ土地の
 又足形をたふさぐに
 りる小村ありけ土地の

又足形をたふさぐに
 りる小村ありけ土地の

国定切上

三



酒を
 国定忠次

市目代二 俳優
 川小團治

国定切上

ついでに

あつたはらに

旗人の

奪



白状

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに



傳

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに



あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

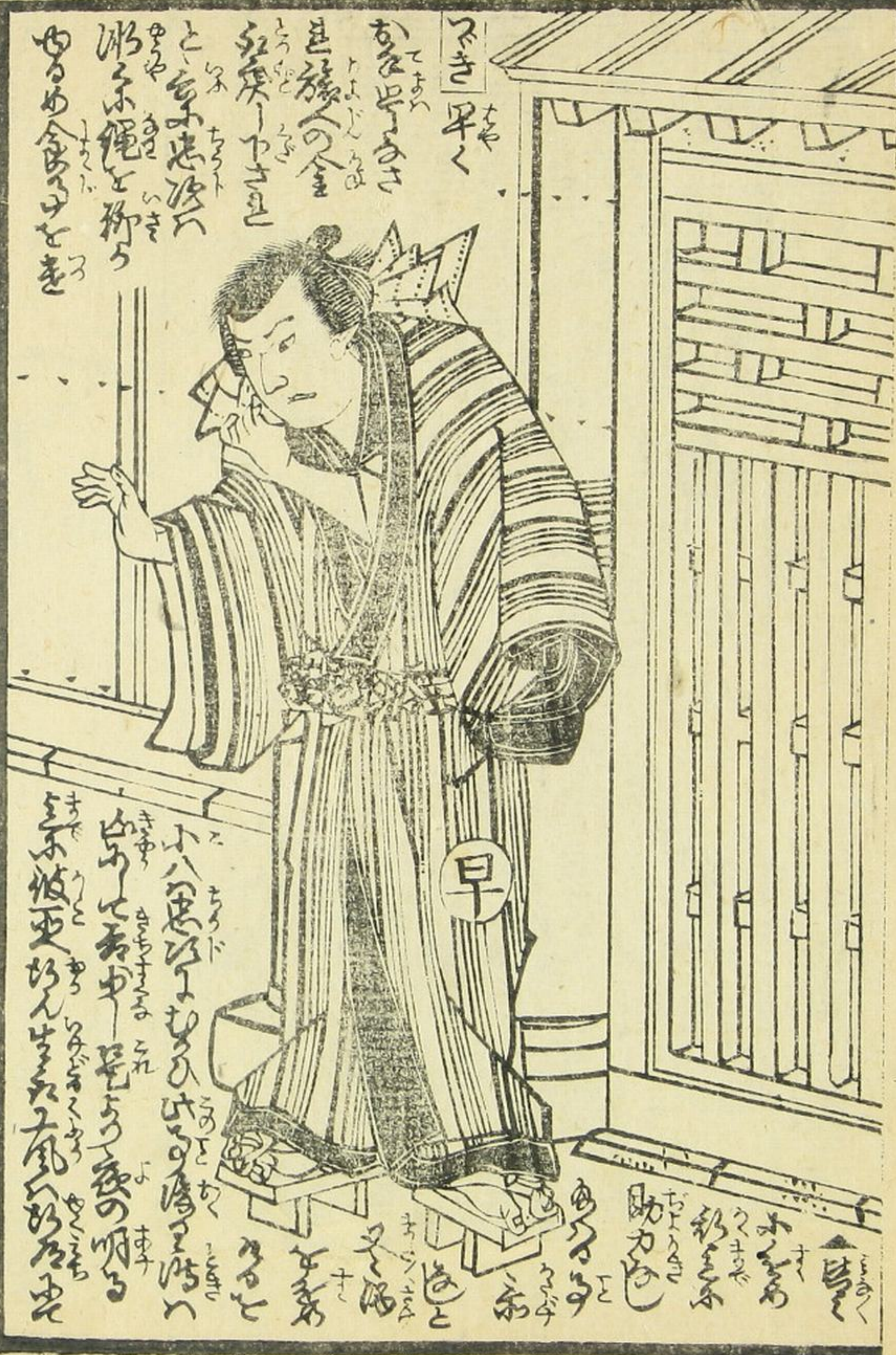
あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに

あつたはらに



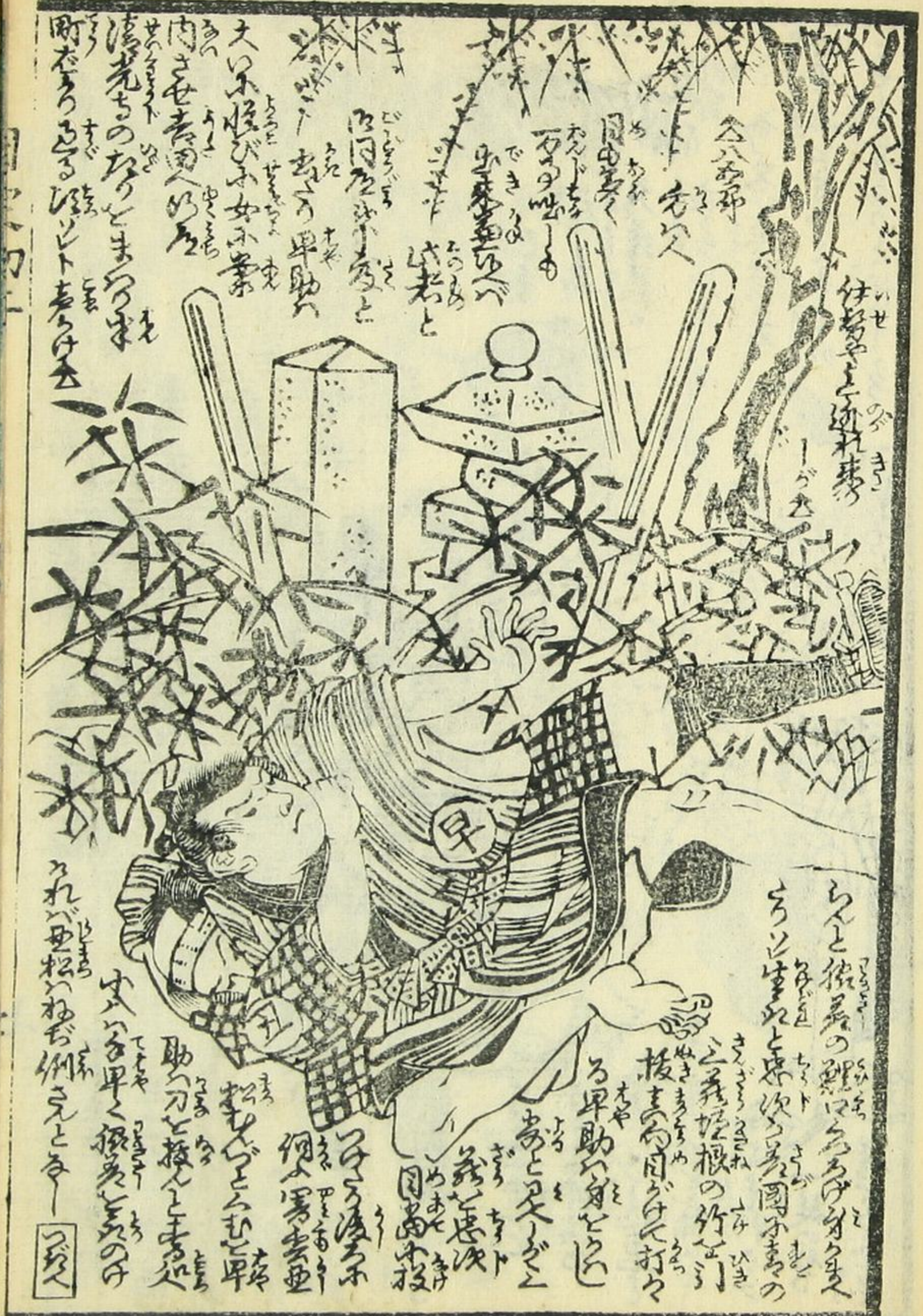
つぎ早く
おまどろま
忠義人の金
早助と世に
と、お忠助の
形も籠と柳の
おるめ金もさ

お忠助は早く
早助の金
忠義人の金
早助と世に
と、お忠助の
形も籠と柳の
おるめ金もさ



お忠助の金
忠義人の金
早助と世に
と、お忠助の
形も籠と柳の
おるめ金もさ

お忠助の金
忠義人の金
早助と世に
と、お忠助の
形も籠と柳の
おるめ金もさ



つぎ 湖京犯上り三階と申すは元々の傍負
 第一果てしき紅蓮の三層申す早助も然りと
 脊骨ゆるさぬ教を洗ひて去り如へ吾國の
 修勢やありとて小女等も紙と出
 早助さんとは一方いふよ
 お出のなる若松
 よも推して
 未定
 とお察
 云世
 とうとう早助
 衣紙とて方よ小猿修者かあて

らんと依居の懸はらふ分分
 ちのほまねと原次は美園おまの
 之を根の竹と
 板まの目かて打
 る早助の能と
 あといふと
 若松
 何人馬車
 ついでに
 助の刀と接んと
 早
 小の早の板まとの
 ねれは世松の板まとの
 一



つぎ 湖京犯上り三階と申すは元々の傍負
 第一果てしき紅蓮の三層申す早助も然りと
 脊骨ゆるさぬ教を洗ひて去り如へ吾國の
 修勢やありとて小女等も紙と出
 早助さんとは一方いふよ
 お出のなる若松
 よも推して
 未定
 とお察
 云世
 とうとう早助
 衣紙とて方よ小猿修者かあて

らんと依居の懸はらふ分分
 ちのほまねと原次は美園おまの
 之を根の竹と
 板まの目かて打
 る早助の能と
 あといふと
 若松
 何人馬車
 ついでに
 助の刀と接んと
 早
 小の早の板まとの
 ねれは世松の板まとの
 一



つぎむらふ村の傍にありて先づはめざりとて
 一日はたつた忠次が毎に湯者を出しつゝ
 るとする内膳助の二面ありつゝ忠次が
 おんきりて云々親を殺しつゝ
 ある縁の何れを此業の五つにのれ
 金持ちのうらまひいけよ
 あはれを運あり
 是ハ世にさか
 皆まゐる方へ
 精申をさす
 まふ屋敷の
 表がなくさるゝの縁をいへば
 お帳のまじりつゝ忠次は押入し
 旅と知りあつた今まを止めせしめ

△一合の
 湯と愛せしめり
 仁
 忠



金を取戻しをせむるより我ハ
 のより取戻しをせむるより我ハ
 取け返しをせむるより我ハ
 男のふんがりのあり
 りそのれを
 取らざる
 と候る
 ありんま
 されば後日一合も
 買ひ入らざるより
 金を入るは
 金を入るは
 金を入るは

△一合の
 湯と愛せしめり
 傳
 大

日本橋區横山町三丁目二番地

つき忠次

めゆせんと

名葉の用

小傳助

換根の葉

出乃一

忠次

そとらと休せ

必勝

忠次

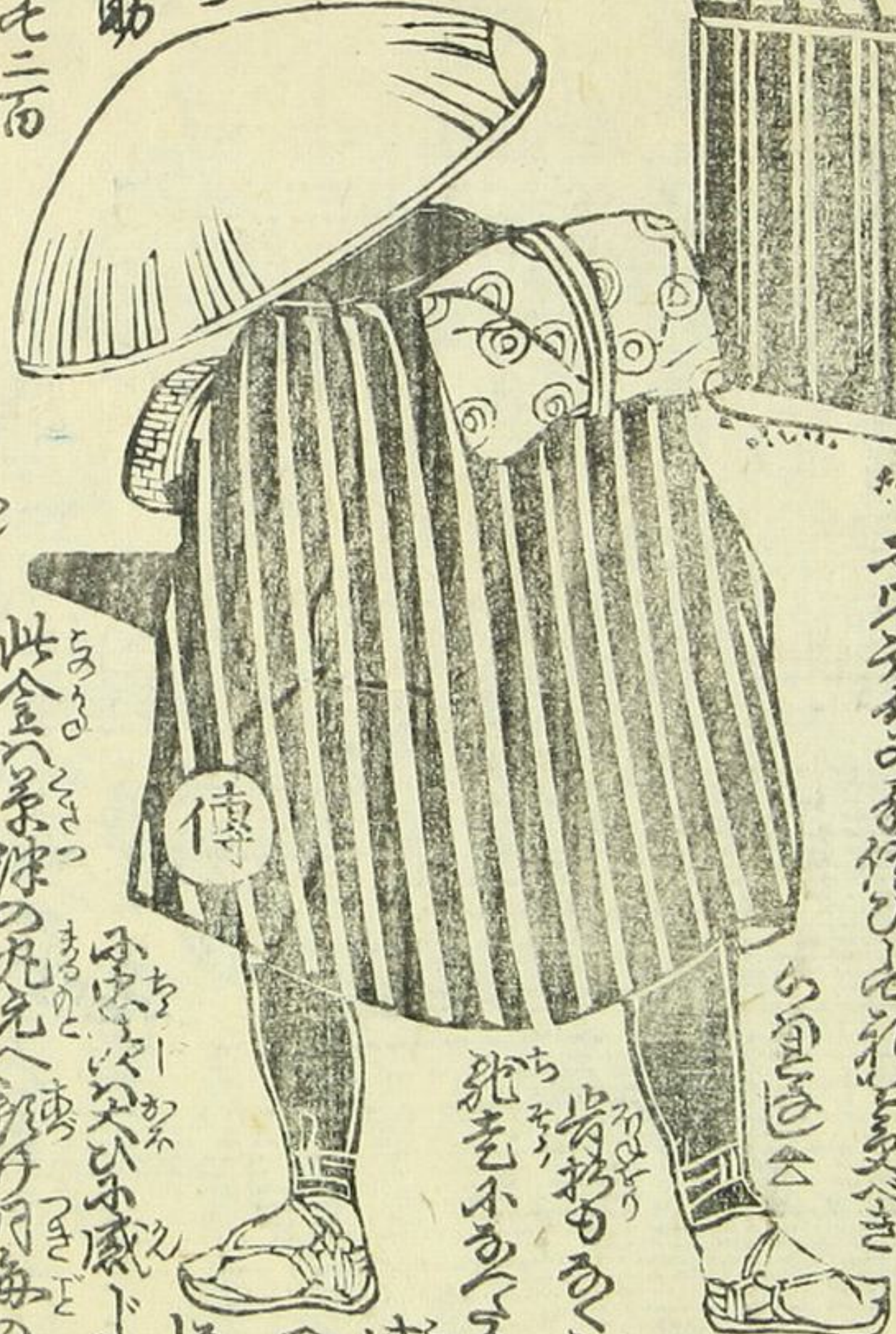
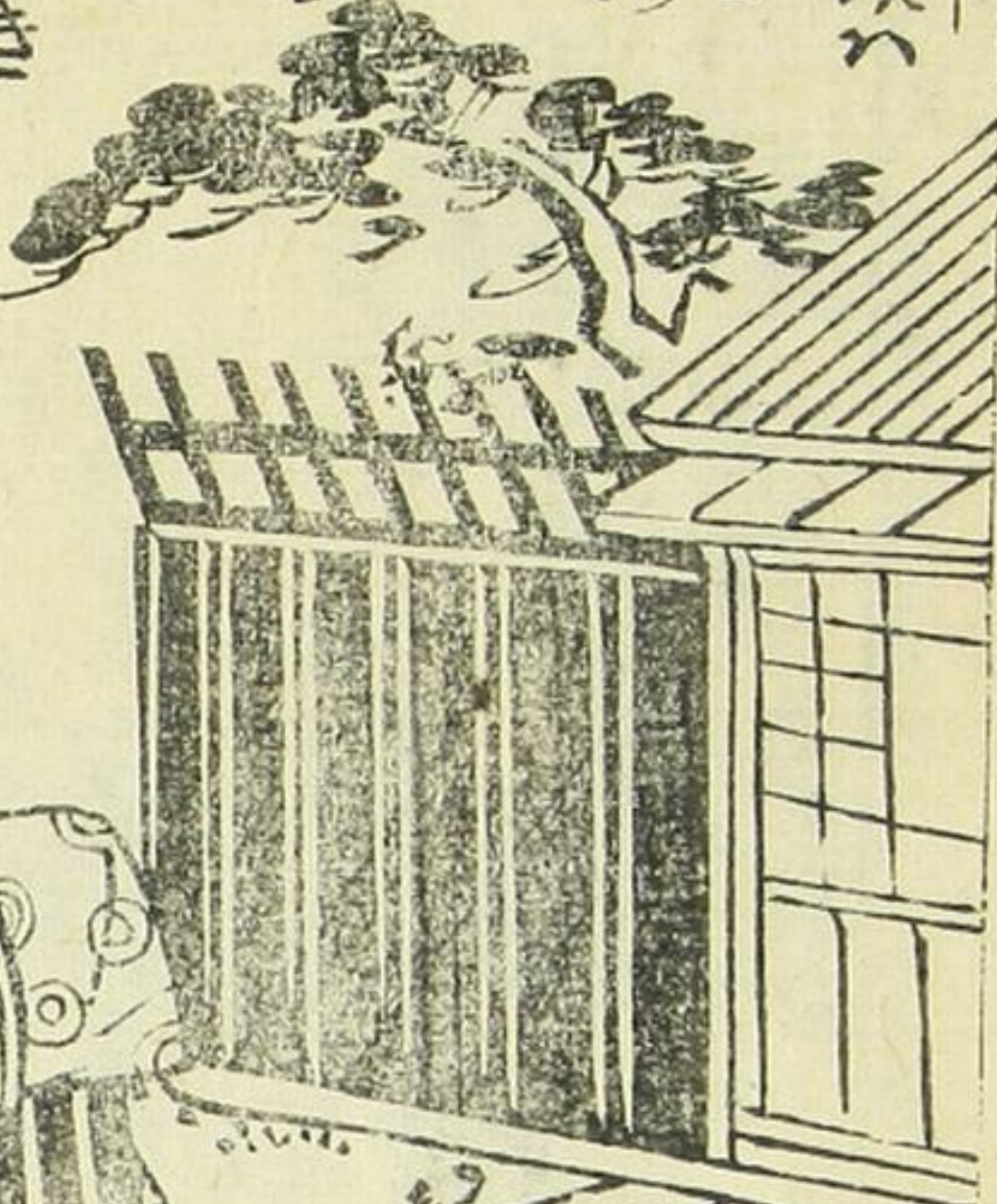
の酒とあり

小傳助

おの金

おの金

おの金



あつと返せと浴盆の愛
おの金の花のちのち
おの金の花のちのち
おの金の花のちのち

おの金の花のちのち
おの金の花のちのち
おの金の花のちのち

おの金の花のちのち
おの金の花のちのち
おの金の花のちのち

官 朝鮮

牛肉丸

許 名法

大包代二十五厘
小包代五厘

官

天泰丸

許

一包代六厘五毛

たんせいの葉

おの金の花のちのち
おの金の花のちのち
おの金の花のちのち

出板御届明治三十二年二月二日

文 地本問屋

錦繪

金松堂

出板人 辻岡文助

本所區元町廿五番地
編輯人 川上謂一郎

日本橋區横山町三丁目二番地



るき長と
 續の如く生人
 首の摩承を承とも
 又とどくばまざるあり
 体の中にある腰ぬけの殺仲を小
 一人もほえより悪境の名に
 今どくの念をも愚小はるま
 然且とも制極の特奏と
 ほとも解も愚はるま
 みれば義理の法もかかざる
 中らるんが却つて我輩の義理を
 こころまぬがたの捨筋神と名よ止まり
 りる早戒ふら且が来て害を引のめああり
 是れもふかふありあかじ坐あるがうんそと



あつらんと色まはる白
 状態せりまう然る小
 そのさる香ちがうおくも
 其我の油るを
 流るるそそ
 血の流るる今
 止らるるれと
 今とて由解せとふ
 一とふらるる人の解る
 上らるるねと見ざる
 我のあつらまはるるも
 我のあつらぬん免れ也
 いさう恨らるるおひせせぬ

今も酒をも毒もめまふと色色金と
 扱かせは徳者いそもさるるさるるを
 云々や我方我中決てあふるる
 向状せしや疾へはまらるる
 上らるるまらるる
 みるどい酒の
 山様をわつ
 どのを無き
 と違ひ現方の
 ろるるをさるる
 ありけり各係が
 候まを急候あり
 忠次ありとるは
 史様るる状せしや疾へはまらるる



へでめらるる一色まはるる
 一親との親は胸中か
 は帳ヤスと書痛の親とあ
 此はあはち
 其まはち
 あつらと安倍古の再為最出
 せのふとあひあつら八物のその
 中小男存をよまを徳とあつら者
 是れはあつらるる

るる 正不 是 戸 表



夫の心... 小舟... 何やら... 赤い...

あはれ... 小舟... 何やら... 赤い...



藤... 何やら... 赤い... 小舟...

つぎふひのせう
 今名の内を
 役もて来る麻の
 まるくを糸原の
 意のか清けふを
 とらばはらりりゆ入
 りくと書つてねえ
 勇者のまふあふ
 らちて返してま
 りんとまをま
 小門のまへを
 いか合するま
 りつせと寝と
 閑さへまの



▲意の情と
 生かすびま女
 勇者のまふあふ
 今名の内を
 役もて来る麻の
 まるくを糸原の
 意のか清けふを
 とらばはらりりゆ入
 りくと書つてねえ
 勇者のまふあふ
 らちて返してま
 りんとまをま
 小門のまへを
 いか合するま
 りつせと寝と
 閑さへまの

旅人月とひふ
 花情とむま
 たりるけい
 浪舟舟水渡
 せなを地ゆり
 一う増くし小門
 の女自ら来る
 ちり受と麻小
 つきあまを海
 志んぬ勇義ハ
 去教へるるま
 ちんぬま
 勇義ま
 ふうか



今夜やと
 ぶかたてあ
 海の波にまらう売しゆり
 写く遠ちの種もまの初と
 ちんぬま
 家の也方の小門ひと
 とまに中の振を何ひ
 勇義ま
 勇と肉よりと
 月か小ま
 ちんぬま



近世紀聞

鮮齋永混画

以下追々発売

綾重夜紋廻春秋

梅堂国政画

三編 大尾

高橋阿傳夜双譚

守川周重画

八編 大尾

夜嵐阿鬼夜花仇婁

岡本勘造作

五編 大尾

水錦間田曙

伊東専三編輯

三編 大尾

金花七變化

魚日文作

三十編 大尾

格蘭氏傳倭文賞

梅堂国政画

三編 大尾

濡衣女鳴神

秀賀作

十編 大尾

出版御届明治十三年二月二日

本所區元町廿五番地

金地本問屋

編輯人 川上謂一郎
日本橋區横山町三丁目二番地
金松堂出版人 辻岡文助

梅堂國政画

尾田彫長

川上鼠邊編輯

金松堂梓

下

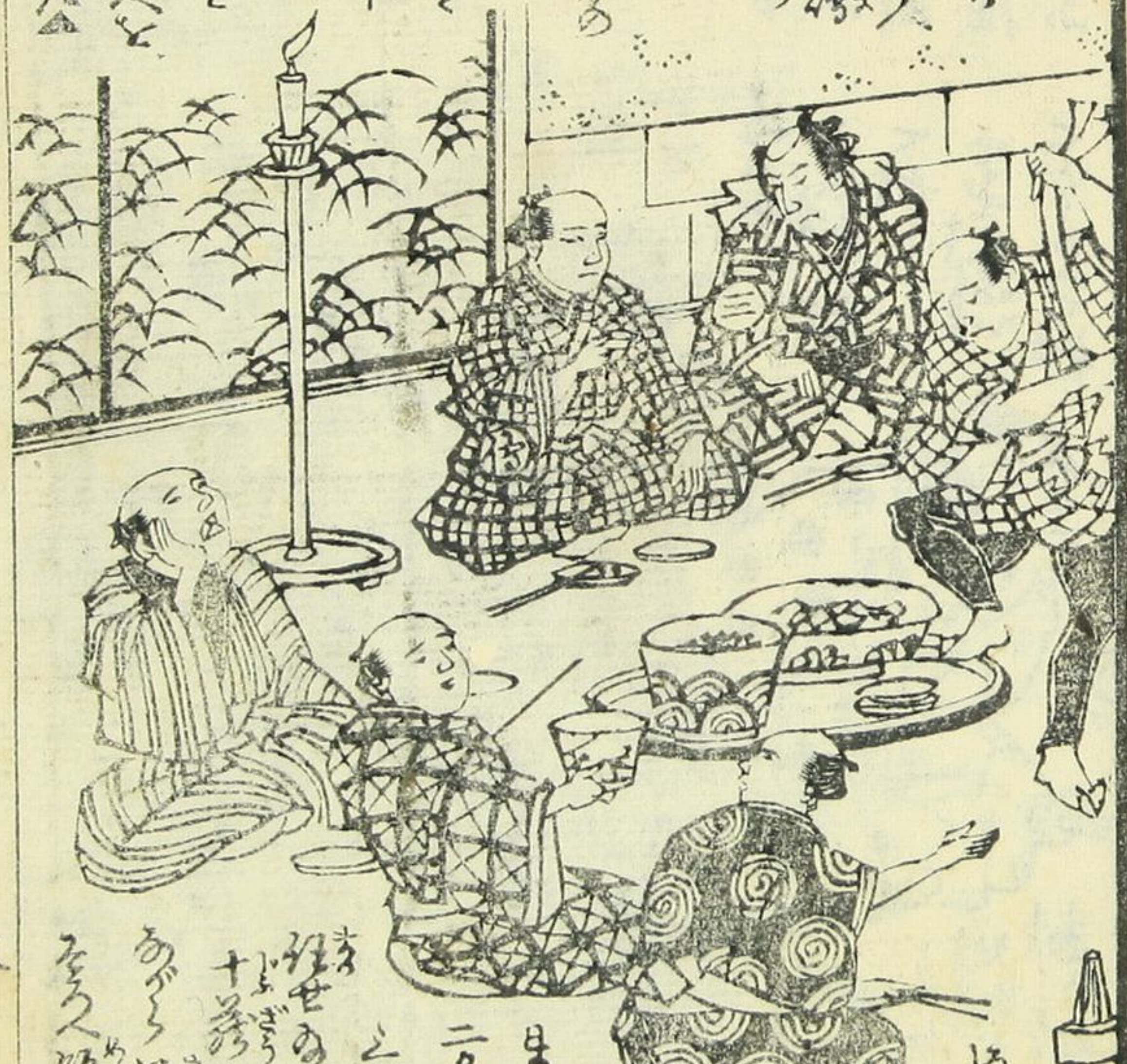


つき二日の音と引つ
 意の方へ出りたるを
 情者入来は忠夜が
 一團の丸帯助が
 へ座をよへるは情者
 直と輝一はれどめ
 且ものをもふ一礼と
 と座をあらる
 忠夜は又もふと傾不
 めぐしつひふ盃
 盃根糖とまり
 だぶりゆを音
 けり頃よ敷よ
 小指うり候も丑



そはより忠夜不
 初と知れせられが
 忠夜は入候を
 あらては方
 の一団入
 まるて文
 が輝と見
 て先相
 意の挨拶
 み要細水
 知枝一さ
 大船小
 糸まる
 ぞう

えとむがき順
 縁の千巻忠夜が
 一人はまの令女がテ
 男が一人水海の左衛
 勇とといふの夫
 だてはあつて女と
 連て文蔵まねて
 若敷をのつてめく
 まひあつて中世に
 やすとあつておゆ中
 らぬやまをよと
 よ忠夜はとあつて
 情者よ十巻とて人
 下男のうらふは



あんな
 はあんなコリヤ
 十巻との
 客人の
 版と酒
 との用
 ちを
 まさか
 二日細水
 とはは
 世の人と
 十巻と
 あつて
 そる人版も流す

つまに 改まつらるるわらわの大長助がて
 流かへりくよを後へりうたをちあ
 多小軍次へ去るは小軍次の家
 小助又よく今も仇討せんと
 多き年を長を流りて目代
 の長紙をり女助と帯別を
 さいわれは年を流り何ゆめと
 女助のうへりて長紙
 のうへりて中世



何の義もみねなく
 女助と囚獄みつるがせ
 新まつ
 遊々
 三子
 老ゆさ
 且なる
 新小軍
 次へり日
 志て入中
 女助め着と長紙
 るどの罪ゆはこの



若くては
 長くは
 右長助
 せん方
 目代
 女助
 女助
 女助
 女助
 女助

えい
 上は
 入は
 金と
 返さ
 多
 の肉
 うみ
 金
 右
 女
 女
 女
 女
 女

つきやぶ
 五十あつち
 白一平あつち
 こがふたの
 中てあつち
 中てあつち

▲つうつんとのふあつち
 去来と四葉まの葉の
 あつちつてあつちつち
 去来と四葉まの葉の
 あつちつてあつちつち
 去来と四葉まの葉の
 あつちつてあつちつち

去来と四葉まの葉の
 あつちつてあつちつち
 去来と四葉まの葉の
 あつちつてあつちつち

きまの世居と
 後一やまん
 のらちつち
 云つ虎
 助へ出
 仍ね脱不
 その月由
 火灯一
 せて虎助
 野猫と
 あひ入来り
 狼ふよさ
 治とらへ

も思ふ
 仍くか
 けま
 引く
 てま
 つる
 先
 面

も思ふ
 仍くか
 けま
 引く
 てま
 つる
 先
 面

中瀬川渡船



若者おろし
 細のつらりと堤根の
 俵小いそ
 板小い
 船もぎんは
 とその支助と
 りんせと全膏
 助けてをせむ
 んごふ必らぞ
 今よ歌あひる又
 その内ふおはまよと惟まひ
 しと立おたり雲の冷舟ゆき
 ありて陸の着包むらるるを

渡一揚を
 船をたか
 ぎ海代もを
 あざふとさか一人のまを
 舟は人たつたを場を
 のほひか
 らみ旅人
 中瀬川
 とを高の
 舟のま
 ぶと人
 ふゆと



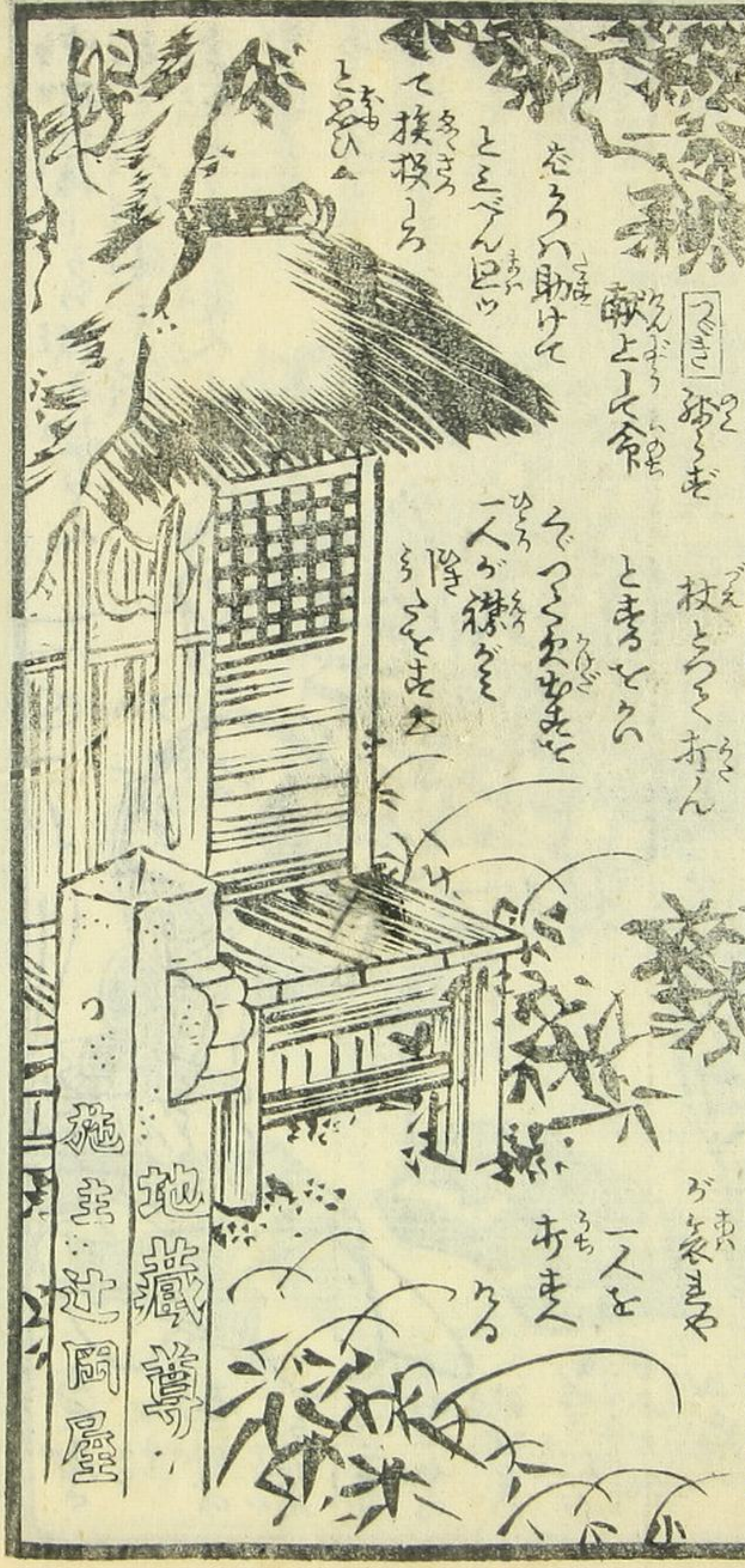
中瀬の渡一らち頼と頼と
 急ぐ一人旅後より二人の
 雲助がライは旅人
 ありて陸の着包むらるるを
 あまねと
 旅人まごま
 惟りとおろし
 船をたか
 ぎ海代もを
 用でもつらつら
 イエもふ海代と
 船のつらつら
 まごま
 中瀬川を渡りし
 とのふ旅人

志て
 がま
 雲助の
 お後者
 が二米
 や一の
 海代と
 あまね
 小刀細
 二痛へ
 かのひと
 仕わら
 舟のま
 懐中の金と

目録

川上鼠三編輯

梅堂國政画



緑秋
つぎの秋
秋と今

をろの助け
ととんこ

一人の縁
一人と

一人と
あま

△ひのめさぎ
よこめくふり
小春波
と二人の曲者
杖とつくおん

△とらん小波
村ぬふら
ちんとおん
二二人の曲者
がまき

地藏尊
施主辻岡屋

官 朝鮮 牛肉丸

許 名法

大色代二十五両

中色代十五両
小色代五両

官 天泰丸

許 名法

たんせい丸の茶

一包代五両

はまの男
かひの
女
ま
丸
丸
丸
丸

文 地本問屋

金松堂

辻岡文助

出板御届明治三十一年二月二日

本所區元町廿五番地
編輯人 川上謂一郎

日本橋區横山町三丁目二番地

010190511966

